加害を心に刻むこと
――戦後60年にみる日独の差――

高橋　武智

数年前からスロベニアのリュブリャナ大学日本研究講座で現代史・現代思想・現代文学を講義する者として、今春のテーマは「戦後60周年の節目にあたって、戦争責任論の跡づけ」をとりあげる以外にないと思い定めていた。この確信は、1月27日のアウシュヴィッツ解放60周年式典をめぐるニュースをインターネットで読んでますます固いものになった。幸い講義は充実した内容になり、学生の反応も予想をこえて好ましかったが、この原稿では、それについて語ることが眼目ではなく、正味五週間の講義中に一週間ある「ゴールデンウイーク」にベルリンを訪ね、日独の60周年の取り組みの差をこの身で体験した、その報告を中心に据えることとしたい。

「心に刻む」――エアインネルング

戦後40周年にあたり、当時西ドイツ大統領だったヴァイツゼッカー氏が行なった演説『荒野の40年』は、あの国の戦後史に残る名演説として、今も重要性を語り継がれている。以前東ベルリンだったウンター・デン・リンデンにあるドイツ歴史博物館で開かれた「戦後60周年展」でも、この演説はふさわしい位置を与えられていた。それまで単に「想起する」とされていた演説中の一語「エアインネルング」が、「(加害行為を)心に刻む」と訳されたことは翻訳史上、画期的で、日本でも一種の流行語となったことは記憶に新しい。

それよりも驚いたのは、30年ぶりにベルリンを訪ねてみて、「エアインネルング」が東西統一後のドイツの公式の政策となり、民衆のレベルでも、「エアインネルングスクルトゥーア」(心に刻む文化)とまで称されて、現代ドイツ人のアイデンティティの一つになりつつあったことだ。

収容所跡や、ユダヤ博物館や、ヨーロッパ・ユダヤ人絶滅の大方針を確定したヴァンゼー会議の会場など、記念施設のどこを訪ねても、行き届いた展示やコンピュータによる問いかけが準備されており、小中学生が学芸員の熱心な説明に耳を傾けていた。

これまでの記述を読まれた人は、ヴァイツゼッカー演説後、一九六八年世代によるナチズム克服の努力と相まって、社会民主党と緑の党の連合が、統一ドイツの政策の形をつくりだすにいたったと考えられるかもしれないが、それはいささか早計に過ぎよう。もちろんこのような大きな流れが、隣国との和解と信頼醸成の流れに貢献し、ヨーロッパ共同体の核心となっていることを否定するものではないが……。

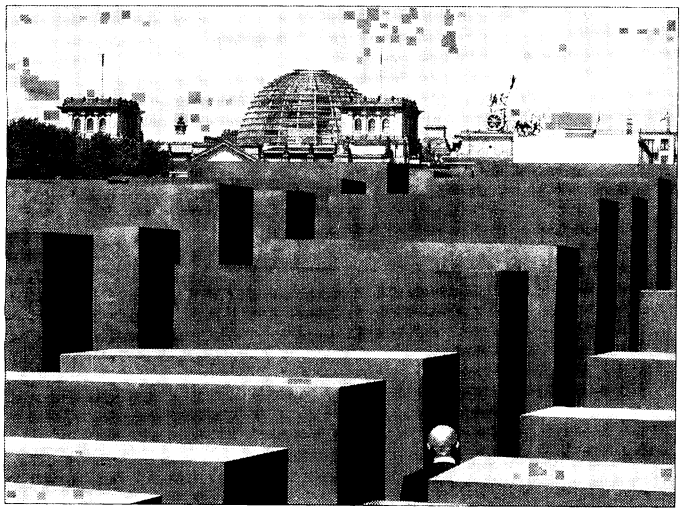
市民運動がアイデンティティ形成の主力

ぼくの強調したいのは、政治家の演説や、政党の連合を下支えするものとして、無数の市民運動が活発に展開され、これこそがドイツ人のナショナル・アイデンティティ形成の主力をなしているらしいという事実である。

卑近な例をあげよう。壮絶なベルリン戦を生き延びた建物の入り口に、通常の敷石よりやや大きい金属板が埋め込まれていることがある。その金属板には次のような事実だけが刻み込まれている。一行目にユダヤ人らしき氏名が記され、この家に住んでいたと明記されている。二行目は、彼あるいは彼女は「何

年にどこどこ（の収容所）に移送された」と、そして最後の行は「何年にどこそこで殺害された」とあるだけだ。

さりげなく「つまずきの石」と呼ばれているようだが、この運動はボンを中心に生まれ、ドイツ全土に普及しつつある市民運動の成果なのだ。当時の住民台帳から発掘した無名のユダヤ人の氏名を、日常生活のなかでも最も日常的な民家への出入りの度ごとに意識させる運動は、「加害を心に刻む」を抽象的スローガンにとどめず、名前と顔のある個々のユダヤ人への具体的な記憶・追悼・慰霊に結びつけることに成功していると言えよう。



ベルリンを東西に分かっていた壁のすぐ西側に、ゲスタポ・親衛隊・国家保安本部の建物からなる巨大な廃墟があった。一九八〇年代に市民運動はゲスタポ本部の地下を掘り返し始めた。すると、建物地下にあった独房群が発見され、それにともなう資料も続々収集された。この運動は「テロルの跡地調査」と呼ばれ、常設された野外展示は多くの訪問者を集めていた。この空き地の再利用についてはまだ成案がないようだが、加害の跡を物語る綿密な資料集が発売されている。

注目すべき「ヨーロッパ」という形容詞

そこからさらに都心部に向かい、ブランデンブルク門の近く、ヒトラー総統官邸の跡地あたりの広大な敷地をつかって、去る5月のドイツ敗戦記念日に完成されたのが、写真に見られる「虐殺されたヨーロッパ・ユダヤ人のための追悼記念碑」である。広すぎて、写真ではほんの一画だけしか再現できないが、注意していただきたいのは「ヨーロッパ」という形容詞だ。ナチは当時支配していた全ヨーロッパからユダヤ人を移送し殺害したのだ（もちろんユダヤ人だけではないが）。数知れぬ犠牲者を象徴する墓石とも、お棺とも解釈できる石の立方体――ただし、高さだけは50数センチから5メートル以上に及ぶ――数千箇を幾何学的に敷き詰めたものである。ぼくが訪れたときはまだ樹木を植えるなどの作業がつづいていたが、個々の石柱のあいだの通路は、自分自身とのみ向き合えるよう人一人しか通れない幅になっていた。

日本人にとっての課題

日本人の平和力にはまだまだ余力があると言われ（前号の井上澄夫さんの文章）、それは意見広告運動の経験にもとづくものだろうが、その大きな部分は、ともすれば被害者としての戦争体験に傾きがちな高齢者の手中に握られた財産ではないか。改憲と靖国参拝問題を前にした日本人の最も重要な課題は、近隣諸国民への加害の経験と記憶とを目に見える形で若い世代へ伝え、かつ歴史として定着するところにあるだろう。それにたいしドイツでは、補償や記念施設を通じてすでに歴史化した他者（ユダヤ人、シンティ・ロマ、ポーランド人、ロシア人などなど）との関係を個人のレベルにもどし、人間化し、再び記憶化する段階にまで来ているように思われた。

（二〇〇五・七・一〇）

（たかはし・たけとも、翻訳家）

【写真】虐殺されたヨーロッパ・ユダヤ人のための追悼記念碑。後景右手はベルリンの象徴、ブランデンブルク門の上部。その左手の巨大な円屋根は、このモニュメント設立の勧進元であるドイツ国会の議事堂。梶村太一郎さん撮影。